

# 田口卯吉論序章

——『東京経済雑誌』創刊に至るまで——

松野尾 裕

まえがき

## I 旧幕臣としての辛苦

- 1 幼年・修学の頃
- 2 下級官吏の「憤激」

## II 『自由交易日本経済論』

- 1 「経済世界の自由民」

## 2 「独立独行」

## III 『日本開化小史』一卷之一、巻之二一

- 1 「経済の道理」による歴史の再解釈
- 2 「廉なる政府」論

## IV 大蔵省辞職——むすび

## ま え が き

田口卯吉（1855～1905年）<sup>1)</sup>は、日本近代の黎明の時に生長し、思想家として、経済論策家としてあるいはまた政治家として、「経済が本来持っている思想的意義」<sup>2)</sup>を深く自覚することに達し得た、明治啓蒙期における日本人のなかでもたぐいまれな存在である。田口卯吉については、日本経済学史研究の領域においてもこれまでに、住谷悦治、堀経夫、内田義彦、杉原四郎らによるすぐれた先行研究があり<sup>3)</sup>、それらがまず参照されなければならない。これらの研究は、田口を「徹底せる自由主義経済学者」（住谷）として捉え、その仕事をトータルに評価することに努めている。かつて河上肇は、『鼎軒田口卯吉全集』第3巻の「解説」において、田口の所説を引用し解説したのちに、「吾々は今、どういふわけで明治時代に〔田口〕博士を通して以上の如き経済学説が日本に現はれたかの社会的根拠について、はつきりした見解を述べえないことを遺憾とする」<sup>4)</sup>と書いている。河上の提出したこの宿題に取りかかるためには、なによりもまず、田口 of 思想形成期に改めて照明をあててみる必要があると考えられる。そこで本稿では、田口卯吉が果たした仕事を論ずるための序章として、田口が経済雑誌社を設立し

1) 田口卯吉は名を鉉，字を子玉といい，鼎軒と号した。卯年卯月の生まれであることから卯吉の通称が用いられた。「鼎軒先生略歴及び年譜」『鼎軒田口卯吉全集』第8巻（吉川弘文館，1990年復刊）所収，1頁を参照。

2) 内田義彦の杉原四郎との対談における言葉。「対談 鼎軒田口卯吉を考える——田口卯吉の現代的意義」『内田義彦著作集』第5巻（岩波書店，1988年）所収，366頁。

3) 住谷悦治『日本経済学史』（ミネルヴァ書房，1958年），堀経夫『増訂版 明治経済思想史』（日本経済評論社，1991年），内田義彦「明治経済思想史におけるブルジョア合理主義」『内田義彦著作集』第5巻所収，杉原四郎『西欧経済学と近代日本』（未来社，1972年）。

4) 河上肇『鼎軒田口卯吉全集』第3巻（吉川弘文館，1990年復刊）「解説」8頁。

『東京経済雑誌』<sup>5)</sup>の創刊——1879(明治12)年1月——によって民間＝市井の経済学者として出立するに至るまでの、彼の思想的成長の過程を追ってみたいと思う。

## I 旧幕臣としての辛苦

### 1. 幼年・修学の頃

田口卯吉は1855(安政2)年4月29日に、江戸目白台の徒士屋敷に生まれた<sup>6)</sup>。父親・樫郎は幕臣西山平十郎の第三子、母親・町子は代々江戸幕府の徒士を勤める田口家の一人娘で、その父は儒学者佐藤一斎の長子・慎左衛門であるから、町子は一斎の外孫、したがって卯吉は一斎の外曾孫ということになる。のちに木村熊二と結婚した卯吉の姉・鑑子は、町子の先夫・耕三との間の子供で、町子と耕三の間には鑑子のほかに3人の男児がいたがいずれも早世し、後夫・樫郎との間に生まれたのは卯吉ひとりであった。卯吉は5歳の時に父を喪い、それ以後は姉、母そして母方の祖母・鑑(後に可都)との4人の生活となった。卯吉は1866(慶応2)年、12歳の時に聖堂において素読吟味を受けて徒士となり、江戸城西丸および本丸に見習いとして勤番し、また銃隊に入って銃のあつかいを習った。元服にあたって佐藤立軒(一斎の嗣子)により号を鼎軒と命名された。この年の暮れに、鑑子が木村熊二と結婚している。

こうした家族関係のなかで成長した田口であったから、母親や姉夫婦への彼の思いは人一倍であったように察せられる。田口はのちに「自叙伝」の執筆を思い立った時——これはおそらく母親の死(1889年、明治22年)をきっかけにしているとみられるが——、その叙述を次のように書き出している。

「我は、この世にいませし様を思い見れば胸さくる心地すめり。嗚呼我とても今少し心を家事に用ひたらんには美しき家にも住みつべく新しい衣をも参らすべかりしを、なまなかに世に立ちて己が意地を遂げんとて分に過ぎたる事どもを企つるまゝに、家の業常に不足勝ちにて、教会などに施し玉ふ僅かの救助金をも折々は拒み参らせし事、今更思へば口惜しきこと限りなし。斯くも速に世を去り玉はんと知らば、斯くは強面なくは仕待らざりしものを。」<sup>7)</sup>

そして、「余の生長せし日まで田口氏の家政は我は、一人にて当られし時なり」と記して、当時の生活の様子を次のように述懐している。

5) 『東京経済雑誌』は田口卯吉が主宰する経済雑誌社から1879(明治12)年1月に創刊され、1905(明治38)年に田口が死去した後も刊行が継続されて、1922(大正12)年9月1日(関東大震災の日)付の第2138号まで発行された。現在、日本経済評論社によって全巻復刻されている。杉原四郎『日本の経済雑誌』(日本経済評論社、1987年)23～26頁を参照。

6) 以下、田口卯吉の経歴は、塩島仁吉著・東京経済学会編『田口鼎軒略伝』(東京経済学会、1930年)および上掲「鼎軒先生略歴及び年譜」に拠る。

7) 8) 田口卯吉「自叙伝」『鼎軒田口卯吉全集』第8巻所収、83頁。なお、この「自叙伝」がいつ執筆されたかは明らかでなく、その叙述は『東京経済雑誌』を発刊するところまでで打ち切られている。

「幕府の末、御徒組屋舗の風習ほど忌はしきものはなかりしとかや。組頭同役などの交際は、志あるもの一日も得耐えぬほどのものにて、我家に婿入せし慎左衛門、耕三、樫郎の三君は、なみなみの人にはあらぬ故、強く苦しみ玉ひぬ。……斯る組屋舗の中にありて女一人にて老母と小兒とを携へ、貧困の家を継ぎ、組頭などゝ交際し、余を生長せしめられしはゝの心労のほどいか斗りならん。」<sup>9)</sup>

田口は幕府へ任官した後、幕臣小林弥三郎に就いて英語を学び始めた。しかし翌1867年10月に大政奉還、12月には王政復古の大号令が出され、徳川慶喜に辞官・納地が命ぜられて、田口の幕臣としての身分も消滅してしまうことになった。同年暮れに、田口は家族と共に目白台を離れ、下谷・生駒前に居た義兄木村熊二の家に寄寓した。この時、隣家に乙骨太郎乙（華陽）が居住していた。乙骨は1868年5月に、徳川家が駿河・府中（後に静岡）70万石に封ぜられると、無禄御供の処遇を選んで沼津へ移り、藩立沼津兵学校の教官となった。この5月に上野で彰義隊の戦いが起ると、田口一家は下谷にも居れなくなり、11月に乙骨の周旋によって横浜へ移り<sup>9)</sup>、田口は旧幕臣飯岡金次の家に寄食し、家族は程ヶ谷の本陣菰部清兵衛方に仮寓した。田口が横浜への移住を決めたのは、塩島仁吉によれば、「英語を学ぶの目的にて、昼は宣教師や、外国商館などに雇はれ、夜は飯岡の為に露店を張つて、骨董品などの販売を担当し、備に艱難を嘗めた」ということであり、田口の英語への向学心は衰えていなかったようである。母親たちの苦労もまた並大抵ではなかった。

「此時我はゝの商業は玉子を外人に売込むことなりしが、是も亦た忽ち破れ、次ぎに烟草を小売することゝなりしが是亦た利薄くして立行かず。又た夜中大福餅を太田橋に売りしこともありしが、是亦た損失なりしなるべし。余は当時十四歳にして現に其实況に臨みしなれども、其困難の事情を知る能はざりき。蓋し此時の事は我はゝと我姉鑑子と共に万事を為せしなり。其心中察すべし。」<sup>10)</sup>

田口卯吉は、この時に尺振八に出会っている。尺は英国公使パークスの通訳として本牧に居住していた。

1869（明治2）年5月に、田口は乙骨太郎乙の周旋によって静岡藩に復仕し、沼津へ召し返された。木村熊二も静岡に職を得て、鑑子と共にすでに同地へ移っていた。田口は、母親と祖母を程ヶ谷に残したまま、乙骨の家に寄寓して沼津小学校へ通い、次いで沼津兵学校に入学した。この時の級友に島田三郎（後に『横浜毎日新聞』主筆。立憲改進党の創立に参加し、第1回総選挙以来衆議院議員に当選14回）がいる。田口と島田とのその後生涯にわたる交友はこの時に始まった。田口は兵学校へ通うと共に、乙骨の開いていた私塾で英書を学び、また中根淑（香亭）の私塾で漢書を学んだ。田口が静岡藩に復仕した時には、無禄御供の旧幕臣に対する

9) 田口の「自叙伝」では、この横浜行きは「我姉婿、木村熊二氏の勸により」と記されている。同上書、84頁。

10) 同上書、84頁。

徳川家の処遇がすでに決まった後であったが、乙骨の取り計らいによって、田口は二人扶持に遇されることになる。そして、翌1870年10月に田口は「資業生」を命じられ、毎月金4両の学資を受けられることになり、11月には五人扶持に遇せられ、さらに12月には、兵学校における軍医養成の方針によって、静岡病院において医学を修める旨の命令が下されたため、静岡へ移った。この時ようやく、鑑子のところへ身を寄せていた母親と祖母に再会することが出来た。この間の経緯を田口は次のように記している。

「余は沼津に移りて後、少しばかりの家禄を得たり。又た木村氏は静岡にて職を玉へり。是に於て祖母と母とを程ヶ谷に置くべからずとて之を静岡に迎へぬ。是より少しは心も安らへ玉ひしならんと思ふ間もなく、木村氏は米国に留学せられぬ。

然れども此時より以後は我姉鑑子が十分に務めたる時には我母は稍や放任せられし時となりぬ。余は時に十六歳にて医学修業の爲め、沼津より静岡に移り一家始めて草深の茅屋中に会合せり。是れ明治三年の事なり。」<sup>11)</sup>

田口は、1870（明治3）年12月末から翌年12月に東京での修学を命じられるまでの1年間、静岡病院で医学を学んだ。病院長林硯海（紀）、戸塚文海、杉田玄瑞らから教育を受けた。そして田口は、林硯海の上京にしたがって東京へ行くことになる。

東京に出た田口は、すでに上京して英学にはげんでいた島田三郎と再会し、共に東京大学の化学専門学生の募集に応じて、ふたり共その試験に及第した。ところが化学科開設が中止となったため、ふたりは大学予備門に入学した。しかし間もなくして田口はここを退学し、尺振八が本所・相生町に開いていた共立学舎に入り、ここで医学の勉強を続けた。

1872（明治5）年10月、田口卯吉は、尺振八が頭取を、乙骨太郎乙が教頭を勤める大蔵省翻訳局に「上等生徒」として4年間に期限に任官することになった。食事に加えて毎月6円の湯浴代が官給された。『鼎軒先生略歴及び年譜』には、乙骨が「貧生を收容して教育する自由を保証せられたゝめ、節を屈して役人となる」と記されており、この乙骨の決断に田口もまたしたがったのであろう。この翻訳局において、田口ははじめて経済学と歴史学に本格的に取り組むことになる。静岡に残してきた家族を心配しつつ勉強にはげむ田口は、アメリカ留学中の義兄木村熊二に宛てた手紙のなかで、勉強への意欲や家族に対する思いを率直に語っている。

「当方日本日新に開化に進み、良師のなきに非ず書籍の欠けたるに非ずと雖も、但々見聞する所殆ど我良心を誤るものあり、弟今日心の未だ定まらざるの時一日も良知識を欲するなり、然れども今日の景、外には久留<sup>12)</sup>之策なく、内に情義之絆あり、東京に遊学候も既に陳謝するに由なく且つ良心に恥づる処に候、家兄若し愚弟之意衷を憐察し、留守宅を守らざるの罪を恕許し給はゞ幸甚是に過ぎず候。（云々）」明治6年3月12日付<sup>13)</sup>。

11) 同上書、84～85頁。

12) 留学の意か。

13) 田口卯吉「書翰」『鼎軒田口卯吉全集』第8巻所収、589頁。

こうして田口卯吉は3年間「上等生徒」として勉強にはげんだ後、1874（明治7）年5月に、「十一等出仕」をもって大蔵省紙幣寮に就職した。俸給は月額30円であった。この時にも、官吏になることに對する田口らしいためらいと決断とがあった。木村熊二への手紙でその心情を次のように記している。

「三十円の故を以て一身を桎梏するは弟罪実に免るべからず、然れども弟の身に於て実に止むを得ざる処、願くは阿兄是を察せよ、且つ家兄及桜井氏<sup>14)</sup>の弟に懇説したもふ所は三十円の事に非ず、上事に<sup>おうえい</sup>執掌して読書の間なからん事を憐み給ふてなり弟全釈褐すと雖も其職は則ち洋藉に關す、且つ博学士と交わることを得たり、唯々一九の論理を学ぶ能はずと雖も事専門に互るを以て之を書生に比するに却て読書に便なり、願くは阿兄之を以て弟の読書に従事することを洞察し、弟の教示に背くのを赦さんことを（云々）」明治7年7月19日付<sup>15)</sup>。

旧幕臣田口卯吉は、こうしてともかくも大蔵省紙幣寮の官吏となることに意を決した。そうして、「一家を静岡より迎へて東京に集まれり。是より余に孝子として尽し得べき時となりぬ」<sup>16)</sup>。この時、田口卯吉は数え年20歳を迎えたばかりであった。

## 2. 下級官吏の「憤激」

田口卯吉が大蔵省に在官したのは1874（明治7）年5月12日から78（明治11）年10月31日までのおよそ4年半である。76年12月には乙骨太郎乙の媒酌により山岡義方の長女・千代と結婚し、78年2月に長男・文太が誕生している。田口の大蔵省での仕事は、主に翻訳の作業であったと思われるが、76年には特に銀行関係の業務にたずさわったとみられ、木村熊二に宛てた手紙には、「当時米洲不景氣之趣き、奈何なる元因に候や、相分り候はゞ御伝へ被下度候、弟銀行之事に従事いたし居候ゆゑ右様の事は委細承知いたし度候」（明治9年3月15日付）<sup>17)</sup>と書かれている。77年1月に紙幣寮が廃止され、田口は大蔵省御用掛・判任官心得となった。俸給は月額30円と据え置きであった。田口の大蔵省内での不満は日に日に積ってゆく。この頃のことを田口はこう回想している。

「余は柔弱なれども人に屈下する能はざる性質を有するを以て、紙幣寮にありし時にも、三度まで紙幣頭に逆らひしことあり、為に五年間奉職せしかども位一級をも進まざりき。茲に於て稍や心に憤激したれば、『日本經濟論』といへるを著はして聊か我が技倆を知らしめんとの心を生じぬ。」<sup>18)</sup>

田口のこの発憤から生み出された著作が、爾後田口卯吉の名を不朽のものとするようになる

14) 木村熊二の兄・桜井熊一（勉）のこと。

15) 田口卯吉「書翰」『鼎軒田口卯吉全集』第8巻所収、595頁。

16) 田口卯吉「自叙伝」、同上書、85頁。

17) 田口卯吉「書翰」、同上書、598頁。

18) 田口卯吉「自叙伝」、同上書、85頁。

『自由交易日本経済論』（1878年刊行）と『日本開化小史』（1877～82年刊行）であることはいうまでもない。このふたつの著作は、田口が1872年10月に翻訳局の「上等生徒」となった時から熱心に勉強し、たくわえ続けてきた経済学と歴史学に関する知的エネルギーのその全てをそそぎ込んで出来あがったものであるといっていよいであろう。

ところで、田口はこの二著作の刊行の準備を進めている間にも、新聞紙上に幾つかの論稿を——場合によっては仮名を用いて——寄せていた。大蔵省の一官吏の仕事に甘んじてはいられなかった田口は、出仕した翌年から早くも、金貨流出、兌換制度、租税政策などをめぐって意見を述べている。上に引用した田口の回想のなかで「三度まで紙幣頭に逆らひしことあり」と記しているのは、あるいはこの匿名による寄稿のことをいっているのかもしれない。大内兵衛はこれらの論稿を評して、「いづれも形に於て小論に過ぎぬが、實質上既に後年の改革論者としての博士の意気を見るに足るものである」<sup>19)</sup>と述べている。そこで、これらの論稿を一瞥しておくことにしよう。

1875（明治8）年の5月から6月にかけて、田口は「黄東山樵」なる仮名を用いて『郵便報知新聞』紙上に、「金貨濫出」の原因をめぐる『東京日日新聞』の意見に対する反対意見を、3回にわたって展開した。このなかで田口は、東京日日新聞記者が「金貨濫出」の一大原因として「金銀均合の混蕩」を挙げているけれども、自分は更に大きな原因があるものと考えたと述べて、不換紙幣の大量発行＝流通過多にこそ問題があると指摘している。すなわち、「我国に於ては不換紙幣なるものあり、此紙幣や通用金の高を増し、其価を減じ、是を外国に逐ひ輸入の高を増すものなり。然らば則ち金貨紙幣の割合こそ濫出の一大原因と云ふべし」<sup>20)</sup>と。加えて、記者が「西洋は金の世界となり、東洋は銀の世界となる」という「金銀の二世界が世に顕出する」と述べていることは、田口にしてみれば「全く経済の道理と背馳するものなり」というほかはなかった。田口はいう。「今我東洋銀貨多くして金貨少なきときは銀貨の価ひ降り忽ち西洋に流出すべし。又其の西洋金貨多く銀貨少なきときは金貨の価ひ降り忽ち東洋に返流すべし、然るときは東西二洋に於て金銀の割合殆んど平均を保つべし」<sup>21)</sup>。つまり、田口がいうには、不換紙幣の整理さえ行なわれるならば、金貨と銀貨の流通は「経済の道理」にしたがっておのずと均衡化されるのであって、「金貨濫出」はなんら恐れるに足らぬことなのである。このように述べる田口の主張の結論はいたって明快なものであった。すなわち、「畢竟東洋は商法繁昌ならず、通用金の多きを要せず、故に其金銀は取り引き上に必要なる高までに減少すべし。西洋に於ては商法盛栄なるが故に取り引き上に必要なる高まで増加すべしと云はゞ過失なかるべき」（傍点原文）<sup>22)</sup>。そして田口は、同紙への3回目の寄稿で、「金貨濫出」問題を自由貿易の主張と結びつけて再度次のように問い質している。すなわち、東京日日新聞記者は

19) 大内兵衛『鼎軒田口卯吉全集』第7巻（吉川弘文館、1990年復刊）「解説」3頁。

20) 21) 22) 田口卯吉「読東京日日新聞」『郵便報知新聞』第670号、1875（明治8）年5月17日発行、掲載、『鼎軒田口卯吉全集』第7巻所収、541～543頁。

「常に自由交易を主張し商法の衰頹を救ふを以て己の任と為す。其憂ふる所を問へば則ち曰く金貨の輸出と。然らば則ち吾曹子〔＝東京日日新聞記者〕は保護税心にして自由交易面なるもの非乎」<sup>23)</sup>と。田口のいうところ、「自由交易論と金貨輸出を憂ふるの論は両立」し得ないのであって、このことが了解された上でなお「金貨輸出を憂ふる」のであれば、それは「保護税説に与みせんと欲する」ものといわなければならないのであった<sup>24)</sup>。

そこで田口の当面の最大の関心は不換紙幣を整理し兌換紙幣を確立することに向かう。「日本商業の隆盛を誘導し内部の健康を強壯にして以て外部の利益を籠取せしむるの策は我今日日本の幣制を改良するより先なるはなし」<sup>25)</sup>と田口が述べたのは1876（明治9）年12月の『横浜毎日新聞』紙上においてであるが、田口は翌77年10月に、「畠山機知」の仮名を用いて同紙上に「日本不換紙幣を改めて兌換紙幣を為すの策を論ず」と題する論稿を寄せ、不換紙幣のもたらしている弊害、その兌換紙幣への転換の具体的な手続きの方法について、かなり詳しく論じている。「日本の将来に希望すべき幣制は兌換紙幣にありと云ふも識者は之を拒まざるべし。故に今まず貨幣流通の理と其価格の存する所以を講究して、次に現今我国に行はるゝ所の不換紙幣を改めて兌換紙幣と為すの手續を述べん」（傍点および圈点原文）<sup>26)</sup>。そこで田口はまず第1の論点として、「貨幣の総計は其国の商品交易の大小に関係し商品の総計に関係せり」と述べ、今日の商品交易の世界にあっては「少しく貨幣と商品との割合他の諸国と異なる処あれば、貨幣多量なれば貨幣外出し、商品多量なれば商品外出し、其割合平均するに至らざれば輸出入の差は決して止まざるなり」と説明する。そして「貨幣を序理するの制国々相同じからざるを以て、真の貨幣の総計なるものは畢竟国々相ひ異ならざるを得ずと雖も、其流通上にありて交易を弁ずるの分量即ち総計に於て差異あらば、必ず外国交易に変動を生ずべきなり。此交易を媒酌するの分量は更に調査し難き処なり。然りと雖も之を増せば物価上り之を減ぜば物価下り、凡て商品の総計に対して適當の割合あること前に述ぶるが如し」と述べて、商品量と貨幣量と物価とは自然調節的な関係にあるという「貨幣流通の理」を簡明に論じている<sup>27)</sup>。ところが日本では維新政権以後、不換紙幣を含めて大量の貨幣が発行されていた。田口の示すところによれば太政官札が約4,800万円、民部省札が約750万円、大蔵省兌換証券が約930万円、そして新外債発行により輸入した貨幣が835万8,224円である。「以上を総計するに七千三百拾五万八千有余円なり。維新以来日本貨幣の増加せしこと瞭然たり。然り而して商品の有様更に進歩せし所あるなし。之を奈何んぞ多量の貨幣は外国に溢流せざるを得んや。如此事情あるを知らずして猥りに輸出入の償はざるを咎む、抑々誤れり」<sup>28)</sup>。次いで第2の論点として田口は、

23) 24) 田口卯吉「読東京日日新聞」『郵便報知新聞』第686号、1875（明治8）年6月4日発行、掲載、同上書、544～545頁。

25) 田口卯吉「国策 第二」『横浜毎日新聞』第1806号、1876（明治9）年12月2日発行、掲載、同上書、545頁。

26) 27) 28) 29) 30) 田口卯吉「日本不換紙幣を改めて兌換紙幣と為すの策を論ず」『横浜毎日新聞』第2056、2057、2076号、1877（明治10）年10月3、4、26日発行、掲載、同上書、547～554頁。

現在流通している貨幣のうちの大部分を占める不換紙幣の「其価の動揺常なきを以て」する弊害すなわち、不換紙幣では一国の交易の収縮・膨張に貨幣量が即応しないことを説明して、一刻も速やかに不換紙幣の兌換化をはかるべきことを主張した。田口は国立銀行条例の改正をもって兌換化の実施をせまる。田口の提示した具体的方策はこうである。「当今世に流通する所の不換紙幣は一億円なり。之を兌換ならしむるに一法あり、国立銀行条例を左の如く改正するに在り。其手續に曰く、(一)今後百万円の国立銀行を創立せんと欲するものは六拾万円の政府紙幣を大蔵省に収むべし、大蔵省は之れを煮滅すべし。(二)大蔵省は其代りとして六拾万円の銀行紙幣と六拾万円の公債証書(但し七銖の利)を新に製して之を附与すべし。(三)銀行は残金四拾万圓を銀行紙幣六拾万圓の準備として備へ置くべし。(四)従前世に行はるゝ公債証書を以て国立銀行を以後創立することを許さず。新国立銀行条例を編成するに右の主意を以てせば国立銀行創立するに従ひ政府紙幣は漸次に銀行紙幣に化し、其悉く滅するに至れば銀行紙幣は兌換ならざらんと欲するも得べからざるなり」<sup>29)</sup>。かかる手続きにしたがって順次国立銀行が設立されてゆき「一億六千余万圓の銀行創立するに及んでは世に一片の政府の紙幣なし」。こうして、一国の交易の収縮と膨張に即応した銀行紙幣の収縮と膨張が実現することになる。「以て物価の浮沈を制すべく、以て貨物の製造を勸奨すべし、是に於て兌換紙幣の制我邦に備はれりと云ふべきなり」<sup>30)</sup>。

不換紙幣の兌換紙幣への転換の緊要性を論じた田口は、翌78年2月には鑄貨について、その鑄潰禁止に対する疑問を「牛嶺逸士」の仮名を用いて『横浜毎日新聞』紙上で論じている。「貨幣所有権の疑義」と題されたこの論稿は、同年1月19日に公布された太政官布告第2号すなわち「通用貨幣ヲ溶解シ又ハ其体面ヲ毀損スル等其他総テ流通ノ用ヲ欠キ候所為一切不相成候」としたことに対する反対論を述べたものである。田口は、貨幣が鑄潰される理由を理論的に説明し、かかる事態は貨幣の「自ら序理するの性」からして当然のことなのだ論じる。すなわち、「此所業をして地金騰貴の事件より発したりとせば、其害なくして却て世に益あるを見るなり。何となれば其貨幣の〔価格が地金に比して〕下落する所以のものは素と其総額の多きがために発するものなるを以て之を鎔解し、之を毀損し、地金となすは実に其総額減少し、貨幣の価格を原位に復せしむるの成績あるべきことを推量すればなり。経済学士が真貨を評して自ら序理するの性ありと云ふは全く之が為めなり。是れ此布告に於て疑惑を抱く所以なり」<sup>31)</sup>と。これに加えて、田口がこの布告に反対する論拠として、この布告が国民の私権を不当に侵害するものであることを説いているのは、注目しておいてよいであろう。すなわち、「此布告に就て大に恐るゝ所あり。其恐るゝ所以のものは何ぞ、此布告の方向或は人民の私権に挟入するあるを以てなり。夫れ政府は貨幣鑄造の権を専有し、人民をして「<sup>ほしいまま</sup>擅」に之に関係せしめざるは国民一般の公利に帰するを以て、我輩亦た之を賛頌するの外なしと雖も、既に一たび之を世上に流通せしめ、人民之を私有するに至りし以上は、政府は全く関係を絶ち、更に

31) 32) 田口卯吉「貨幣所有権の疑義」『横浜毎日新聞』掲載号不詳、同上書、554～556頁。



其庫中に入るものに非らざれば之を所有するの権なからん。將た改鑄するの権なからん。又之を鎔解するの権もなかるべし。蓋し貨幣も一商品なり、人其勞力を費し、之を得て以て其所有となす、何ぞ他の所有物と異ならんや」(傍点原文)<sup>33)</sup>と。この小文において田口は貨幣の本質をめぐる基本的問題を提出しているのである。

この他に、田口は1877(明治10)年10月に「直税間税の區別を論ず」と題する論稿を『横浜毎日新聞』に寄せている。そこでは、租税を直接税と間接税とに區別する考え方には「租税の性質を誤解せるものあり」<sup>34)</sup>と論じられている。ここには、後に主張されることになる田口の租税転嫁自由論<sup>34)</sup>の原型が提示されていると見ることができる。

以上に見てきた通り、田口の諸論稿はいずれにおいても、原理的考察をまず行ない、それをふまえて単刀直入に政策上の要点を明示する、という骨太な議論を展開したものであったことがわかる。

## Ⅱ 『自由交易日本經濟論』

### 1. 「經濟世界の自由民」

田口卯吉が『自由交易日本經濟論』を著わすことを決意した動機のひとつは、先に引用した田口の回想からも知れるように、大蔵省紙幣寮における上層部との意見の対立、そしてそれに伴う自分の処遇についての不満から発した「憤激」にあったようであるが、著作の構想自体は、紙幣寮に出仕した1874(明治7)年の暮れにすでに具体化し始めていた。田口は同書の「凡例」のなかで執筆の経緯を次の通り記している。「明治7年の末余会一紳士と我国外国交易の得失を討論し始めて稿を起し、爾後考究殆んど三年、終に此書を成すに至れり。今題して日本經濟論と曰ふ、其自由交易の四字を冠らしむるものは其主義此に在るを以てなり」<sup>35)</sup>。ここで田口は「考究殆んど三年」と述べているが、これは同書執筆の構想を立ててから出版に至るまでに3年をついやしたと見るべきであろう。というのは、田口は、木村熊二に宛てた明治9年12月22日付けの手紙のなかで、「自由交易論も来春に至り刷行可仕候所存候出来候はゞ御一覧を請奉るべく候」<sup>36)</sup>と述べている。したがって、『自由交易日本經濟論』の原稿は1876(明治9)年12月の時点においてすでに出来上がり、印刷に取りかかっていたと推定されるのである(もち

33) 田口卯吉「直税間税の區別を論ず」『横浜毎日新聞』第2072号、1877(明治10)年10月22日発行、掲載、『鼎軒田口卯吉全集』第6巻(吉川弘文館、1990年復刊)所収、86～88頁。大内兵衛、同書「解説」5頁を参照。

34) 川又 祐「自由主義財政論の展開—田口卯吉と租税論—」『法学紀要』第32巻(日本大学、1991年)所収、を参照。

35) 田口卯吉『自由交易日本經濟論』『鼎軒田口卯吉全集』第3巻(吉川弘文館、1990年復刊)所収、3頁。

36) 田口卯吉「書翰」『鼎軒田口卯吉全集』第8巻所収、599頁。

ろん、印刷の過程で推敲が加えられることは考えられるが)。しかし、出版が実現するまでにはさらに1年の時間がかかった。その理由は主として資金難にあった。「されども、之を出版するの資金もなかりき。之を出版したるは実に友人島田三郎君が陸奥宗光君に説きたるに因るなり」<sup>37)</sup>。こうして田口は同書を1878（明治11）年1月によりやく出版することができたのである。

さて、田口はまず『自由交易日本経済論』の課題を次のように説明している。すなわち、「自由交易保護法の利害を述べんには先づ経済学の大綱を記せざるべからず。日本外国交易の得失を論ぜんには、先づ徳川氏以来の商業の変遷を記して其病の存る処を詳かにせざるべからず。故に此書務めて此二事を説き以て自由交易の日本に害なく益ある事を示せり」<sup>38)</sup>と。そこで以下では、田口が説くところの「経済学の大綱」と「徳川氏以来の商業の変遷」とに注目して、彼の主張を検討することにしよう。

『自由交易日本経済論』の「第一 緒言 経済学の主意を論ず」は次のように書き出されている。

「大地の外に在て流動するもの之を大気となす。大気の赤道に在るものは熱して上騰し遙に走る、其両極に在るものは冷て下降し遙に赤道に入る、騰降交代して未だ嘗て止む時あらざるなり。大地の面に在て流動するもの之を水流と為す。赤道の水流は熱して膨脹し遙に両極に流る、両極の水流は冷て収縮し遙に赤道に趨く、周流順環して未だ嘗て止む時あらざるなり。其中間に在て流動するもの之を人為現象となす。人為現象の発する人類と共に発す、而して社会の狭き其流動極て狭く、社会の広き其流動愈広し。天地の剖判せしより以来、人為現象の流動未だ嘗て今日の如く疾く且大なるあるを聞かざるなり。嗚呼其れ交易社会の広きが為め乎」<sup>39)</sup>。

田口は、まず人類が地上に未だ現われない時には自然界では「各自弱強の勢と生出の遅速とに従て配分の多少」が決定されていたとして、これを「自然の配分」と名付ける。次いで人類が登場して「自然の配分を攪乱して地球の外状を一変する」におよんだ。この「人類の変形せる世界の有様」を「人性の配分」と名付ける。この場合、「人性の配分」は「人の天性に従て現象を分畫」するものであるから、その結果「需要多きものは現象の数多かるべく、需要少きものは現象の数少かるべし。其多少あるの量を目して配分と云ふ」。ただし、あるひとりの人物が米よりも酒を好むからといって、社会全体において米よりも酒の方が一層多く需要されることにはならないと例示して、これを「人性自然の配分」と名付けている。すなわち「人性自然の配分とは社会の天性之を配分せしとの義なり」。そして、「立法の目的は常に此の配分を自由ならしむるに在れば、人為現象必ず多量に発生するを得べし」<sup>40)</sup>。このように述べて、田口は、「人為の現象」を自然、人、社会という三者の関係において捉える視点を提示することか

37) 田口卯吉「自叙伝」、同上書、85頁。

38) 39) 田口卯吉『自由交易日本経済論』『鼎軒田口卯吉全集』第3巻所収、3頁。

40) 同上書、4～5頁。

ら議論を説き起こしている。それでは、経済学とは如何なる学問であるのか。田口はいう。

「天の発する所、日月星辰河海山澤皆是れ自然の現象なり。人の発する所、貨財知識皆是れ人為の現象なり。大気河海の流動は是れ実に自然の現象にして、地理学<sup>まさ</sup>の当に講ずべき所なり。学問知識文章宝物貨幣の流動は是れ実に人為の現象にして、経済学<sup>まさ</sup>の当に講ずべき所なり。凡て人の労作考究する所必ず宇内に現象を生ず。経済学とは総て此人為の現象の動静の法を講ずるの学なり」<sup>41)</sup>。

かかる「人為の現象」は実にさまざまであり得る。「或は物貨の形状を变ずるものあり、家屋器物衣服飲食の如き是なり。或は人心を变ずるものあり、知識学問の如き是なり。或は人の体勢を变ずるものあり、技芸の如き是なり。是皆人間の需用<sup>(マ)</sup>に<sup>(マ)</sup>応ずべきものにして、皆人の発現する所なり」。「需要とは人為の現象を吸引すべき人間の引力なり」(傍点原文)<sup>42)</sup>。この「需要」にしたがって「人為の現象」の「周流循環」するところが「経済世界」なのだ、と田口は述べている。「故に経済世界の状態は人間万般の事業を総轄するものにして、極て錯雑紛繁一言一句の容易に之を述べ得べきに非ず」。そうして「人為の現象」の蓄積が、すなわち「富」である。したがって「富を以て唯貨物にのみ用ゆべき語と釈義」するのは誤りである。この「富」の増殖にあたっては「分業の勢」が大いに与かった。しかも「素と其勢の由来する所天性<sup>もとづ</sup>に本くを以て、分業の術は約束上より起りたるに非ず、自ら其人の天性体質<sup>(マ)</sup>の所長及び其土地の景況に従て其職業を分配せしなり」。そして、この「分業」が「交易の起源」である。「人の始て其職業を定むるに当て必ず先づ社会の衆需を期す」<sup>43)</sup>。このように田口は「経済世界」の説明を進め、そして、この「交易」によって結び結ばれた「経済世界」の姿を人体にたとえている。「此の社会は人々互持<sup>アヒモチ</sup>の一大構造物にして、近く諸を譬ふれば、経済世界の機関は恰も人身の機関の如し」<sup>44)</sup>と。

そして、田口にいわせれば、「経済世界」は「政事上の区分」すなわち国家単位よりもさらに上位に置かれるものである。彼の論じるところはこうである。「政事上の区分なるものは経済世界に切要のものに非ざるなり。何となれば今日各国境を連ね、海関を置て人為現象の流動を分畫すと雖も、素と是れ経済世界の外貌の一区分に過ぎず。其真状に至りては其変異を發する事なし」。「経済世界に諸独立国の対峙するは、全く人身の内に諸機関のあるが如し。現象の發生し、順循し、消耗する道行きを論ずる経済学に於ては、通商する社会を以て一体と見做すに付き、此等の区分は講究するに及ばざる程感覚なきものなり。且つそれ人性の配分なるものは全く政事上の区分と縁故なきものなり」<sup>45)</sup>。

41) 同上書、5頁。

42) 同上書、6頁。

43) 同上書、6～8頁。

44) 同上書、9頁。

45) 同上書、9～11頁。

田口は、以上の主張をしめくくって次のように明言している。

「苟も人間の皮を被むり此地上に立つものは宜しく活眼を開きて社会の真状を考察し、吾人の最も制馭を受くるものは政府に非ずして経済世界の衆需に在る事を尋思せよ」。「吾人は経済世界の自由民にして、其支配を受くる事は政府の支配を受くるより頻且つ切なる事を見るべし」<sup>46)</sup>。

この一文に青年田口卯吉の信念がよく示されている。

以上に見てきた田口の思想的・理論的立場から、『自由交易日本経済論』の以下の諸章では、「万国交易の発する所以」「保護法の害ある所以」そして「産物転換する所以及び其方法」<sup>47)</sup>といった、彼の政策原理の一貫した主張が展開されることになる。

ここで田口は自問自答している。「富とは何ぞや、日本の人民勞力して産する所の者はなり」。「彼の西洋貨物は何の為に來る、是れ其富に従て平均を求むるに因るに非ずや」<sup>48)</sup>と。田口にとって「富」とは「人民勞力」の結果以外のなにものでもない。そして、その「富」の実情に応じて商品の輸出入の実勢もまた自ずと決定されるのである。だから「人為を以て輸入を減殺する」ことも「人為を以て輸出を養生する」ことも——この場合の「人為」は「政府の支配」の意味と理解される——、「人民勞力」から発想する田口には、決して納得することの出来ない事柄なのである。「凡て職業に貴賤なし。一人に最も利益ある職業は一国に最も利益ある職業なり。之を自然に任せば各種の職業は各々天然の利益と人身の稟性<sup>ひんせい</sup>に従て恰當の割合に分割すべし、若し政府に於て一方を偏愛せば、必ず此の恰當の度を攪擾せん。然らば仮令ひ其目的の職業を盛にし得るも、一国一般の利益は却て減少するなり」<sup>49)</sup>。田口は「人民勞力」に全幅の信頼をおいている。そして、政府の「偏愛」を受けることなしに「人民勞力して産する所」の「富」を増大させることの重要性を説いているのである。これこそが「一国の勉励」と「一国一般の利益」につながるのだ、と。

「地面を耕して米を作り、麦を作り、絹を作り、綿を作り、以て住地となし、以て田園道路となし、彼を多く営み、此を少く作る等は皆人性自然の然らしむる処余因て之を人性自然の配分と称す。彼の保護の法を用ひて人性自然の勢ひに従ひ〔逆ひの誤りか〕一職業を盛大にして、彼を衰凋せしむる等は是れ所謂人能天に勝つの処業にして、必ず一国に威權ある小部分の人が為す処なり。余故に之を人作の配分と名づく。……何れの国の景況を見ても多少此人作の配分なきものは稀なり。米<sup>こめ</sup>国<sup>こく</sup>我國の如き職業を管制せる国は論なく、自由の有様なる国に於ても其政体を立つるの地にては、富は人作の上に偏集すべし。其<sup>ほか</sup>他<sup>ため</sup>如此例し少なからず。然れども之を天下に見れば人作の効驗は極めて少なるものなり」<sup>50)</sup>。

46) 同上書、11頁。

47) 同上書、52頁。

48) 同上書、15頁。

49) 同上書、22頁。

50) 同上書、52頁。

## 2. 「独立独行」

田口は、以上に論じてきた自身の理論的主張が理解されるならば、日本の経済は保護主義政策が採られずとも決して危ぶむに足らざることが熟知されるはずであると述べ、そして続いて、封建鎖国の世からぬけ出して間もない日本の実情について次のように見る。「抑も国の法制及び習俗の変異は商品の需求に感じ、其供給に感ず。故に一時に之を改良せんと欲するは、病を治するに劇剤を用ふるが如し。能く其医せんと欲する所を治し得べしと雖も、其害必ず他に發すべし。然り而して此劇烈なる改良は我日本の習俗法制に於て目撃する所なり」<sup>51)</sup>。つまり、田口の見るところ、政府の採ろうとする施策は日本の「人民」の現実的な事情にそぐわないものであって、「病を治するに劇剤を用ふるが如」きものなのである。その政府が行なおうとしていることはあたかも次のようである。

「試みに聞け、野蕃人種の国内に巨大なる銀行を創立せしめば、此銀行能く繁栄すべきか。如此き人民は通貨を用ふるを知らざれば何を以て銀行繁栄するを得んや。僻村の中に巨大なる蒸気器械を置いて衣服を製せば其社中利益多き乎。僻村は衣服を買ひ得るもの極めて少し、焉ぞ如此き多量の衣服を製するを要せん。何となれば野蕃及び僻村は巨大なる職業を養成すべきの地に非ざればなり。故に其貨物如何に美なりと雖も、其職業如何に佳なりと雖も、其養成の地未だ成らざるに先て之を開かば、決して之を維持すべからず。若し之を維持せんと欲せば、其全民必ず損失を蒙むるべし。彼の未開の政府が民を苦めて燦然たる宮殿を作るの害は、全く其養成地に適せざるを以てなり」<sup>52)</sup>。

田口は「野蕃人種の国内」にあるいは「僻村」にふさわしい経済的發展のための制度的諸条件の整備を求めている。ここに見られるのはローカル市場優先の発想である。その後具体的に実施・展開されてゆくことになる「殖産興業」の政策路線のもつ根本的問題性を、田口はすでに先取りして認識していたのであった。

「然らば則ち封建時代の貨物、今日と異なる所以のもの知るべきなり」。封建時代における百般の事物は「皆な封建の需求に應じて發し、封建の制習之を養成せしものなり」。したがって封建の制を脱した今日にあっては、「従前の富は亦た富に非ざるものあり、従前の貨物は亦た売るべからざるものあり、其貨物新天地に適するまでには多少の変動を起さるべからざるなり」<sup>53)</sup>。そこで田口は、「今日日本の商業は実に変遷の間に在」ることを、「久しく封建の制に染み、鎖港の習に染みたる」人々に対して、具体的かつ簡潔に説明している。まず徳川幕藩制下における経済社会のしくみを田口は次のように述べる。「夫れ人質及び参勤交代の制は六十余州の利潤を江戸に偏聚せしむるものなり。何となれば諸侯の地の買手たるべきものを江戸の買手たらしむるなり。（故に諸侯地の売手亦た江戸に來りて売る、故に人口と富とは江戸に偏聚せり。）米納藩札の制は米価を江戸及び大阪に下だし、金銀貨を江戸に駆逐せしむる勢ひ

51) 同上書、52～53頁。

52) 53) 同上書、54頁。

あり。諸侯をして阿諛<sup>あゆ</sup>を競はしめ、寺塔を築き、河流を堀らしむる等は諸侯を空渇し、其利を江戸の商賈<sup>しょうぎや</sup>に得せしむるの策なり。是を以て海内の利は江戸に偏聚し、江戸の地は自然の有様にて集蓄しがたき程多量なる人口と富とを集蓄せり。……諸侯の地は自然の有様にて蓄へ得べきより、少量の人口と富とを蓄へたり」<sup>54)</sup>。これはまさに江戸への過度集中の事態を指摘したものである。しかし、いまや徳川幕藩制は解体し、「外国交易及び戊申の変動」は、あらゆる貨物や事物の「養成の地」を変化させたのである。そして、かかる変化から「目今商業の衰零する源因」が生じている。田口はその原因について3つの点を取り上げて論じている。

第1。徳川幕藩制の「維持すべからざるに臨んで俄かに之を解かば、其利益従前の如く江戸に落ちざるに由り、江戸の人口は解散せざるべからず、其資本も減少せざるべからず」<sup>55)</sup>。「蓋し封建の制江戸に利益を偏聚せしに当てや、人口亦た多く富亦た多し。故に一人一箇の利益は一樣平均なりと雖も、江戸に落つる所の利益の総額は多量なり。今や公平の制を以て海内の利益東京に偏聚する事なし」<sup>56)</sup>。

第2。鎖国体制下の日本にあっては「其地に適せるものも多く作るを要せず、其地に適せざるものも多く作らざるべからず。何となれば総ての需求は其国人文に限り、総ての供給も其国人文に止まればなり。故に俄かに外国交易を開き、其需求を世界にし其供給を五洲にせば、是まで手慣れし職業も衰ふ所あり、木綿<sup>てん</sup>鉄砂糖の類是なり。是まで従事せし職業の大に蕃殖するものあり、絹茶乾物米麦の類是なり。斯く盛衰の生ずるに由り、突然開港するときは大に資本職業の運転を生ぜざるべからず」<sup>57)</sup>。

第3。「以上の諸変革と共に感衝せられたるものは彼の商人社会に久しく侵淫したる特許の廃止は是なり。……商人の特許を剝がるゝが如きは国家永久の大計にして、人民一般の利益なりと雖も、其変動は最も甚だし。維新以来巨商大賈の数々転覆するもの、多くは特許滅却に因るなり」<sup>58)</sup>。

田口は「目今商業の衰零」がもたらしている「人民」の痛みを十分に理解していた。だから田口は、性急な改革を望まず、漸進的な政策遂行を求めたのである。田口はいう。「余は悪制と雖も俄かに之を改むれば必ず害あるべし善政と雖も俄かに施せば必ず害あるべきを実見し、凡て新法を施し、旧法を改むるは漸次に之を行ふべく、決して急速の効験を奏せんと企つべからざる事を知るなり」<sup>59)</sup>と。しかし、ともかくも日本は今日まで「維新以来星霜既に九年、特許の迷漸く醒め遊逸の弊漸く脱し、危殆<sup>きたい</sup>の極は既に経過したり。日本の商人は將に独立独行五洲と通商するに至るべきなり。嗚呼保護論者よ、今日の景況は其れ如此きなり」<sup>60)</sup>。田口は日

54) 55) 同上書, 57頁。

56) 同上書, 59頁。

57) 同上書, 59～60頁。

58) 59) 同上書, 60頁。

60) 61) 62) 同上書, 62頁。

本の経済人が「独立独行」であるべきことに期待をかけていた。「<sup>せんじやく</sup>孱弱にして国人の保護を要するが如き商業は、暫時も日本の交易に於て之を見るを欲せざるなり」<sup>61)</sup>。そして田口はいう。「日本の目的とすべきは米洲亜細亜の中心市場たらん事を期するに在り。此目的を達すべきの道路は自由交易に存する事必せり」<sup>62)</sup>と。

### Ⅲ 『日本開化小史』——卷之一、卷之二——

#### 1. 「経済の道理」による歴史の再解釈

田口卯吉が『自由交易日本経済論』の原稿を1876（明治9年）のうちに書き上げていたことは、Ⅱ章の冒頭に示した田口の木村熊二宛て手紙の記述に加えて、同書中の「維新以来星霜既に九年」という叙述、また同書中に掲げられている明治2年以降の日本の年次別商品・貨幣額一覧のうち明治9年の箇所は6月時点の数値となっていることなどから推定して、ほぼ誤りがないのではないと思われるが、一方、田口のもうひとつの代表的著作である『日本開化小史』がいつ頃から執筆され始めたかについては詳らかでない。田口自身は同書執筆の経緯を次のように記している。

「此の如き著述〔『自由交易日本経済論』のこと〕は徒に時を費やすのみにて家計愈よ困難となりしかば、幾分か金を得んとて日本歴史を編まんと企て、最初は『権人問答』と云ひて俗体の文にて書き初めたりしが、友人の勸に因り、之を和文めきたるものに書き改め、之を『日本開化小史』と改称せしかば是亦た当初は売れ難き書物となりぬ」<sup>63)</sup>。

疑問点は、この文のなかで「此の如き著述は徒に時を費やすのみ」と述べている箇所をどう理解するかである。つまり、田口は『自由交易日本経済論』の原稿の完成までにはかなりの時間をついやすものと判断したので、その執筆と同時並行して日本開化小史も書き進めた、とも考えられるし、あるいは、『自由交易日本経済論』の原稿は書き上げたのだが、その出版の目途が立たないので、ともかくも「幾分か金を得ん」ために『日本開化小史』の執筆を思い立った、とも考えられる。いずれであるかを速断することはさしひかえられるべきであろうが、わたくしは後者ではないかと推定する。というのは、『日本開化小史』の「自序」が書かれたのが1877（明治10）年9月であり、同書はこの年から82（明治15）年10月までの6年間に6冊に分けて刊行されたものであるから、同書の原稿は一度に全体が書き上げられていなくてもよいことになる。『日本開化小史』は1876（明治9）年の秋頃から原稿の執筆が開始されて、翌年秋にその第1冊が刊行され、そうしてその続編が書き継がれてゆき82年秋の最終・第6冊の刊行に至る、というのがわたくしの推定するところである。

したがって、『日本開化小史』がまず刊行され始めて、その4ヶ月後に『自由交易日本経済

63) 田口卯吉「自叙伝」『鼎軒田口卯吉全集』第8巻所収、85頁。

論』が刊行されたということから、ただちに、このふたつの著作に現われている田口の思索について、その時間的順序を位置づけることには危険がある。つまり、内田義彦がいうように「『日本開化小史』で展開した史観を適用して分析した」<sup>64)</sup>ものが『自由交易日本経済論』であるといいきってしまうことには問題があるように思われるのである。田口は、『自由交易日本経済論』の執筆によって維新政権以後の現実社会における自己の思想的・実践的立場が確固たるものとして自分のなかで意識されることになり、次いで、その思想的・実践的立場を日本の歴史の大きな流れのなかに正当に位置づけるべく歴史を再解釈しようとしたのが、『日本開化小史』執筆の動機であったのではなかろうか。わたくしが本稿において『日本開化小史』の検討を『自由交易日本経済論』についてのその後におくのは以上の考えによるものである。

さて、田口卯吉は『自由交易日本経済論』のなかで幕藩制社会が解体した後の「商業の状態」を論じた際に、それに先立って次のように述べている。「蓋し宇宙広しと雖も、万物多しと雖も、以て発せしむるの源因なくして一物として発生する事なし。其源因たるもの常に一箇のものに非ず、必ず許多の件々集合して働き以て一成果と為す。故に余は之を源因と云はずして寧ろ之を養成の地と云はん」<sup>65)</sup>。「貨物の発するも、亦た必ず養成の地ありて而して後に発するものなり。夫れ人今日の如き家屋を作る所以のものは木鉄石瓦の件必ず之を然らしむるに非ずや。今日の如き衣服飲食を用ふる所以のものは、絹毛菜肉の性必ず之を然らしむるに非ずや。若し世に家屋を作るの材あらざらしめば人間何を以て家屋を作るを得んや。若し飲食衣服を作るの物質今日の如くならざらしめば、飲食衣服の形状性質必ず今日と異なるべきなり」<sup>66)</sup>と。ここには田口における開化史の方法、すなわち、ある事象を捉えるに際して常にそれをもたらした諸「源因」＝「養成の地」との関係においてかかる事象を理解し叙述するという方法が、不十分ではありながらも示されているといえるであろう。

そして田口は『日本開化小史』のはじめの箇所において、「凡そ人心の文<sup>ススメルススマザル</sup>野は、貨財を得るの難易と相俟て離れざるものならん。貨財に富みて人心野なるの地なく、人心文にして貨財に乏きの国なし、其割合常に平均を保てる事、蓋し文運の総ての有様に涉りて異例なかるべし」<sup>67)</sup>と述べている。つまり、田口の歴史観によれば、「人心」の開化の度合いは「貨財を得るの難易」によって規定され、そして「貨財」のあり方はその「養成の地」によって規定される、というわけである。田口は同書において、「神道の濫觴」の時代から「徳川治政」までの間について、「貨財」のあり方とその「養成の地」を検討し、「人心の文野」の様子を辿ることを試みたのであった。以下では、1877、78（明治10、11）両年に刊行された「巻之一」および「巻之二」について、その内容を検討することとする。

64) 前掲、杉原四郎・内田義彦「対談 鼎軒田口卯吉を考える——田口卯吉の現代的意義」『内田義彦著作集』第5巻所収、359頁。

65) 66) 田口卯吉『自由交易日本経済論』『鼎軒田口卯吉全集』第3巻所収、53～54頁。

67) 田口卯吉『日本開化小史』『鼎軒田口卯吉全集』第2巻（吉川弘文館、1990年復刊）所収、8～9頁。



## 2. 「<sup>やすあがり</sup>廉なる政府」論

(i) 『日本開化小史』巻之一を田口は次のように書き出している。「人は生れながらにして神威を解するものにあらず、宗教を信ずるものにあらず、之を解し之を信ずるものは数多の想像の累積せしに因るなり」<sup>68)</sup>。すなわち、人間の生活は、その初発においては衣食を求めることにのみ専心し、「毫も其心を他事に働かしめ」ることはなかったが、「貨財を得るの術」が進むにしたがって、「死を嫌ふの天性よりして、靈魂の死せざる事と、靈魂の帰する処とを想像し、次に死を避けんとする天性よりして、自然の怪力を散するの心起り、次に言伝の粗なるよりして、祖先を神聖と想像するの心起り、次に靈魂不死の考へよりして、祖先の靈魂天地に照臨ましますと想像し、次に祖先の靈魂神となりて、之を祭れば諸の災害を治し給ふの威力あることを思ひ、是より神威愈々盛んにして、人間万般の所業を指揮賞罰せらるゝに至れり」<sup>69)</sup>。これが「神道の濫觴」である。そして田口はいう。このようにして「開闢より歳移り世代りて、人心次第に進歩しものゆゑ、政府は自ら神教政府の性質を得たり。神教政府とは神の子孫万民を治め給ふの政府なり」<sup>70)</sup>。この時の「神教政府」に対して下す田口の評価は肯定的である。すなわち、「神道の教愈々進むに従ひ、人民の天皇を尊敬するの気は益々盛なりしかど、帝王と雖も綺羅錦繡の美を見ず、玉樓瑤殿の榮を知り給はざりし世なりしかば、自ら尊大にせらるゝ事もなく、誠に質素にして善く人民に近接し給へり」<sup>71)</sup>と。続く仏教伝来とその政治・社会への影響についての記述は、明治維新の廃仏毀釈の運動がその叙述に影響したのであろうか、簡略なものにとどまっております。加えて、「夫の神教政府に存する所の宗門上の権威は全く僧尼に帰し、天皇は其尊威を減じ、政府は其権力を殺がれ、人心を得る事、蓋し従前の如く容易ならざるなり」<sup>72)</sup>と論じられている。そして、ここにもたらされた弊害を田口はこう見る。「斯く天皇の尊威減ぜしより、大臣の専横の弊起れり」<sup>73)</sup>と。

時代は奈良・平安の時に下る。田口はいう。「上古の世、其政簡易にして其俗勇壮なりしかば、絶えて文弱遊惰の人を見ず、……中古奈良の朝より文弱の気次第に蔓延し、平安に移りて後其勢最も甚し」<sup>74)</sup>。この点に関して田口はさらに説明を加える。「抑々神武天皇より以来、打続いて来りし政府の建方は、誠に質素なるものにて、武官文官の差別もなく、天皇其上に君臨して自ら万機を統べ給へり。……官吏の数も至つて少く、年貢の収納も極めて軽ろかりしならん。……されば上古の時代には、政府も至つて質素にて、都の内も人民極めて少かりしと思はるゝなり」<sup>75)</sup>。しかし、大陸諸国と頻りに交通する頃になると、諸々の使節を通じて「彼国の

68) 同上書、8頁。

69) 同上書、12頁。

70) 71) 同上書、13頁。

72) 73) 同上書、15頁。

74) 同上書、15～16頁。

75) 同上書、16～17頁。

華美にして驕奢なる政治の仕方を目撃し、朝廷にては自国の質素にして簡易なる小政府を恥かしく思ふの心出でたり」<sup>76)</sup>。そこで、「模擬の能に於て最も敏捷なりと自ら誇れる日本人」のことであるから、漢学の博士、仏教の僧侶らによって大陸の文物が陸続と日本に伝えられ始めた。そして「斯く博士と僧侶とに煽動せられし模倣<sup>マホ</sup>ずきの殿上人等は、いかで自ら分別あらんや、何ものなれ唐より渡りしものならんには、悪しきものはよもやあらじと思ひしもの」<sup>77)</sup>であった。だがしかし、他方で「人民」の生活はどうなっているのだろうか。田口は続けてこう述べている。「かく其時の人民の賤しき有様をば差し置きて、早く其政府を立派に為さんと企てたり。人民の富を唐の如くにならしむる方法には目を附け、偏<sup>ひとえ</sup>に朝廷を唐風に飾り立てんと目論みたり」<sup>78)</sup>。「是より政治の扱方非常に手重になりて、復た古の如く廉<sup>ヤスアガリ</sup>なる政府にはあらざりき。其後に至りて其制愈々全備せしかば、政府益々盛大になれり」<sup>79)</sup>。「学者はあれども人民に鈞合はず、……官吏は多けれども其当るべき事務少し」<sup>80)</sup>。かくして、平安時代に至れば人民と政府とは「愈々懸隔」し、「而して朝廷遊惰の勢は益々進めり」<sup>81)</sup>。

こうした「養成の地」によって「貨財」のあり方はどうなったのか。そして「人心<sup>ススメルスス</sup>の文<sup>マゾル</sup>野」はどうか。田口はこう結論している。「かかる風俗の盛なる時に於きて、貨財の有様旧時より盛なるは言ふまでもなけれど、之を作る人は其利を得ずして、門閥の官吏悉く之を得たり。されば此等の人々は貨財を得んとて心を磨く事もなく、政治上の事に付て心を勞する事もなし」<sup>82)</sup>。

(ii) 『日本開化小史』巻之二では、律令制社会の解体から鎌倉幕府治世までの時期が対象となっている。この巻の叙述は、「鎌倉政府」に対する田口の肯定的評価によってつらぬかれており、田口の倫理観および政治観を明示させた箇所として、同書全体のなかで中心的な位置を占めるものといつてよいように思われる。

田口は巻之二の冒頭において「倫理の情の起源」を説いている。すなわち、「抑も人に忍びざるの心とは、憐れなる状態を見るを嫌ふの私利心なり、親族に美服を着せしめんと欲するは、自ら飾らんと欲する心と同一ならずや。……されば倫理の情は成長せる私利心なり」<sup>83)</sup>と。ところが世の識者は「他人を利せんとの心と、自身を利せんとの心とは、全く水火相ひ容れざるものゝ如く思ひ、其惡を制止するの心を良心と云ひ、善を制止するの心を情欲と云ひ、二種の心脳裏に存すと判定したり」<sup>84)</sup>。田口はそうではないのだと、さらに説明を続ける。「倫理の情」と「私利心」とはそもそも同根のものなのであって、この「私利心」＝「倫理の情」に基づく行動を世間の評判に徴した結果が「善惡邪正」である。そして、人間の生活や行動は、善でもなければ悪でもない「私利心」＝「倫理の情」に発するものなのである。田口はいう。「抑々此

76) 77) 78) 同上書、17頁。

79) 80) 同上書、18頁。

81) 同上書、19頁。

82) 同上書、20頁。

83) 84) 同上書、25頁。

忍びざるの心は何ぞ、人皆な其所有物を愛するの私利心あり、即ち親族兄弟朋友を愛するの心あるなり。夫の孝や悌や素と此私利心と同一なり、嗚呼人類の腦裏、豈に二種の相容るべからざるが如き心あらんや、皆な私利心の成長して其枝葉を広めしが為めに、枝葉の内に相<sup>ていご</sup>低<sup>ご</sup>悟するもの発するなり、然れども其本源に至りては、素より一根より出でずんばあらず。之を要するに倫理の情は私利心の枝葉なり、善惡邪正の考は世人の評判を得て而して後に発するものなり。故に善惡の教は社会の評判に発するものにして、其所謂善とは行ふ人に利なるに非ず、寧ろ受くる人に利なるなり、其惡とは行ふ人に害なるに非らず、受くる人に害なるなり。行ふ人の利害得失は嘗て其算用中に入らざるなり。……故に利害得失の他人に関せざる以上は、善にも非らず惡にも非らず。見よ見よ、商人を以て善人とは云ふまじ、農業を以て惡業とは評すまじ、而して社会の人の最も務むべきは、此善とも惡とも評せざる所業に存する事なり」<sup>85)</sup>。

田口によれば、武士層がこの「私利心」＝「倫理の情」によって取り結ばれた社会が封建社会だということになる。田口はこれを説明して次のようにいう。「蓋し人は常に他人より勝れたる事業を為さんとするの心あり、是亦た生を保たんが為には、外物に打勝つ事肝要なれば是心起るなり。自ら以て他人より勝れたる事業を為せしとするも、世人も亦た爾<sup>しか</sup>く思ふや否知るべからず、故に之を世の評判に徴し、其事業の大小を質し、世人の大とする所人之を為さんと欲し、世人の小とする所人之を為さ<sup>ら</sup>んと欲す、是蓋し榮譽を望み恥辱を避くるの心にして、高名心の起源亦た之に外ならざるなり」<sup>86)</sup>。「斯く高名心に臣従の色を添ふるに及んで、倫理の情は更に社会の勢をして忠義の気を発し、之を称赞せしむるに至れり」<sup>87)</sup>。

田口は、「鎌倉政府」の封建制と「平安政府」の集権制とを対比して、「鎌倉政府」の優良さを次のように説いている。「郡県と封建とを比ぶるときは、封建こそ弊害多からめ、然れども中央集権の甚しき郡県ならんよりは、封建は利ある事なり、何となれば地方の俊傑は其土地の政務を得て甘んずる所あればなり。抑々内治の調はざるは、古来政務を人民に与へざるに出づるもの多し」<sup>88)</sup>と。その上、田口の見るところ「鎌倉政府」は、かつて「神教政府」がそうであったように、「廉なる政府」である。「鎌倉政府の内部は、極めて簡易なるものにして、当務の人亦た甚だ多からざるが如し」<sup>89)</sup>。「政府の扱方簡易にして、歳出多からざりしゆゑにや、徴租の割合も大に減少せり」<sup>90)</sup>。そして、「時に或は經濟の説を持して以て政務を行ふものあり、其見る處正鵠を誤まるもの莫<sup>な</sup>きにあらずと雖も、……節儉を以て主と為し、政府自ら手を下して、製作を営み職業を保護せしことなきを以て、大なる過失を起せしことなし」<sup>91)</sup>。

85) 同上書、26頁。

86) 同上書、30～31頁。

87) 同上書、31頁。

88) 同上書、30頁。

89) 同上書、35頁。

90) 同上書、38頁。

91) 92) 同上書、39頁。

この結果は、文化の開化のあり方にまで影響をおよぼした。すなわち、「唯だ節儉極めて甚しくして、文学を勧めしこと無く、学校を設けしことなく、奢侈を制し、人智の進歩を妨げし跡あるを見て、或は識者の議論を招くものあらん。然りと雖も平安政府の開化は、地方を抑制して以て養生せしもの、国家の為に願ふ処にあらざるなり、鎌倉政府の下に退歩せしは、是れ自然の適度に達せしなり、況んや我国民間の著書見るべきものあるは、実に鎌倉政府の時より始まれるをや」<sup>92)</sup>。田口は、こうした「廉なる政府」のもとにあってこそ、地方の政治的自立と民間における文化の開化とがあり得るのだという考えを、『日本開化小史』の叙述の基底につらぬいていたのである。

#### IV 大蔵省辞職——むすび

こうして『日本開化小史』は第1巻、第2巻と刊行し始めた。『自由交易日本経済論』も出版までには難航したけれども資金の提供を受けてともかくも刊行することができた。しかし、それらの売れ行きはいずれも捗々しくなかったようである。そして田口は次のように記している。

「去れば余が家計は日に月に窮せり。祖母、母、姉、甥祐吉<sup>93)</sup>及び余なる一家族は三十円の月給にては給する能はず、月々に負債は嵩みけり。此時友人沼間〔守一〕氏は元老院なる翻訳物を余に周旋せり。『大英商業史』及び『麻氏経済哲学』是なり。余にして之を反訳するときは、月々七八十円の財を得るのみならず、其余に閑暇を得て我が取掛りたる『日本開化小史』を完成するを得べきに付き、官を辞するの念を起せり。此時の課長は岩崎小二郎氏にて前課長とは異にして切に余を愛し、百万余を止めんとしたれども、五年間の官海は余をしてほとんど困ぜしめければたつて辞したり。』<sup>94)</sup>

田口の大蔵省辞職の直接的なきっかけは、まず月額30円の俸給では一家の生活を維持してゆくことが出来なくなったこと、そして沼間守一によって翻訳の仕事が持ち込まれ、これによって月70～80円の収入の目途がついたことであつた。これによって、田口は「三度まで紙幣頭に逆らひ」ながらも4年半の間在職した大蔵省を辞職することに意を決したのである。

これまで迎ってきた田口の成長の過程を、ここで、まとめてみることにしよう。

田口卯吉は代々江戸幕府の徒士を勤める家に、1855（安政2）年に生まれた。ちなみに、明治啓蒙期のチャンピオンたる福沢諭吉<sup>95)</sup>が大坂堂島の中津藩蔵屋敷に生まれたのが1834（天保

93) 祐吉は木村熊二・鍍子夫妻の子供。熊二のアメリカ留学中、卯吉が面倒を見ていた。なお出典では「姪」となっているが「甥」に訂正のうえ引用した。

94) 田口卯吉「自叙伝」『鼎軒田口卯吉全集』第8巻所収、85頁。

95) 杉山忠平『明治啓蒙期の経済思想 福沢諭吉を中心に』（法政大学出版局、1986年）を参照。

5) 年であるから、田口と福沢との間には21歳の年齢差がある。この田口の生い立ちは、その後の彼の生き方に大きな影響をもたらしていることは誤りない。1868年5月の上野の彰義隊に対する官軍の総攻撃の時には、福沢はアメリカ留学から持ち帰った書物を用いて、芝・新銭座の英学塾で悠然と経済学を講じていたのに対し、一方の田口は母親・祖母と共に下谷にあった姉・鏡子の嫁ぎ先である木村熊二の家に身を寄せ、砲声に怯えながら、貧窮の生活を強いられて始めていた。田口一家は生計を立てるためにまもなく横浜へ移るが、そこでの暮らしは困難を極めたものであった。この時に、英国公使パークスの通訳を務めていた尺振八と出会ったことは、横浜時代の田口にとってほとんど唯一の幸福であったかもしれない。しかし、この横浜での生活も立ち行かなくなり、69年5月に、田口は静岡藩に復仕し、沼津へ移った。西周が校長を務める沼津兵学校に入学し、次いで静岡病院で医学を学んだ。72年には東京での医学修学を目指して、大学予備門に入学した。しかし間もなくして田口はここを退学してしまうのである。それが如何なる理由によるものであったのかは明らかにし得ないが、とにかく、大学予備門は田口の意にかなうところではなかったのであろう。田口は、尺振八が開設していた共立学舎に入り直す。そして同72年10月に田口は尺振八が頭取を務める大蔵省翻訳局の「上等生徒」となった。ここには静岡時代にあらゆる面倒をみてくれた乙骨太郎乙も教官として在職していた。この「上等生徒」としての3年間に、田口は経済学の勉強に取り組むことになる。この時の田口の飢渴をいやす飲食の如き猛勉強ぶりは想像するに難くない。この時に田口のなかに築かれた思想的骨格はその後の田口を生涯にわたって規定することになる。田口は、翻訳局で数多くの洋書を読み、そこから多くの知識を得ているが、それらは文字通り田口に血肉化したために、その後の著述・言論活動において、それらの知識の借用あるいは模倣といった意識は田口自身のなかにはおそらくなかったのではないだろうか。それほどまでに田口はこの「上等生徒」時代に自己の思想を構築させてしまったのである。そうして田口は1874(明治7)年に大蔵省紙幣寮に就職した。在職の期間は78年10月までの5年間たらずであったが、しかし、その間にも「三度まで紙幣頭に逆らひしことあり、為に五年間奉職せしかども位一級をも進まざりき」と彼自身が回想している通り、大蔵省の政策に対する田口の不満は日々つのるばかりであった。そうした不満の捌口は、新聞への寄稿であった。田口は「経済の道理」を前面に押し出して、幣制問題を中心に、不換紙幣整理の断行などの堂々たる主張を展開しているのである。

田口にとって「富」は「人民労力して産する所の者」にほかならない。その田口が政府の押し進めようとしていた「殖産興業」の路線に根本的な疑問をもっていたことは、『自由交易日本経済論』にすでに明らかに示されている。田口のいうところを再度引用しておこう。「僻村の中に巨大なる蒸気器機を置いて衣服を製せば其社中利益多き乎。僻村は衣服を買ひ得るもの極めて少し、焉ぞ如此き多量の衣服を製するを要せん」。それでは、田口の考える日本近代の構想は如何なるものであったのか。まず第1に江戸＝東京への過度集中の解体、第2に自由交易体制下での商品生産、そして第3に独占の排除、である。そして田口は強引な近代化を求めな

い。「凡て新法を施し、旧法を改むるは漸次に之を行ふべく、決して急速の効験を奏せんと企つべからざる事」。日本の経済人があくまでも「独立独行」で成長してゆくことに期待をかけた田口の楽観的展望は、その後の日本の現実によって否定されてゆくことになる。

『自由交易日本経済論』において「経済の道理」から「人為の現象」＝社会のあり方を見るという方法を明確にさせた田口は、次いで、この方法を用いて日本歴史の大河を再解釈しようとした。それが『日本開化小史』として結実した。同書では「貨財」獲得のあり方から人心の「文ススメルススマザル野」の展開を説明することが、大胆な筆致をもって試みられたと見ることができる。同書において田口は、人が周囲にいる人々に対して抱く「倫理の情」は「私利心」の成長したものであり、もともとこのふたつのものは同根であると説いている。人の生活や行動はこの「私利心」＝「倫理の情」に発するものであって、これは、「世人の評判を得て而して後に発する」観念である「善悪邪正」とは厳に区別されなければならない。人が農業や商業に従事して働いていることの意味を「善悪邪正」によって判断することは出来ないのである。そして田口は次のように述べる。「而して社会の人の最も務むべきは、此善とも悪とも評せざる所業に存する事なり」と。田口は、武士層がこの「私利心」＝「倫理の情」によって結びつれた社会が封建制の社会だと見ているが、ここで田口が「鎌倉政府」の封建制に、「廉なる政府」だという根拠をもって肯定的な評価を与えていることに、本稿ではとくに注目した。「政府の扱方簡易にして、歳出多からざりしゆゑにや、徴租の割合も大に減少せり」。「節儉を以て主と為し、政府自ら手を下して、製作を営み職業を保護せしことなきを以て、大いなる過失を起せしことなし」と田口は言っている。そして田口は、「我國民間の著書見るべきものあるは、実に鎌倉政府の時より始まれる」と述べて、かかる「廉なる政府」であってこそ、民間における文化の開化があり得ることを説いているのである。

福田徳三は、田口卯吉の思想形成について論じた際に、それに果たした「内在的原因」を重視して、田口が旧幕臣として、江戸っ子として明治維新の現実を捉えたことを指摘し、「兎に角、[田口]先生は、同じく文明開化論者であり乍ら、福沢先生とは事異って終始一貫、政治的被圧迫者のイデオロギーを頑守せられた。而して、一切の事を其のイデオロギーを以て観察し、解釈し、言論せられたものかと思ふ」と解説している<sup>96)</sup>。たしかに幕臣田口卯吉にとって、その人生の出发点において直面した幕府崩壊・明治維新という事態は、彼の人生観あるいは社会観を形成するうえで決定的な意味をもったに違いない。そうして「政治的被圧迫者」たる田口は、弱冠20歳になるまでに、「経済の道理」をもって日本近代の「開化」のあり方を問い直すことに自己の果たすべき使命があると自覚するに至っていたのである。その早熟ぶりは驚嘆に値する。

田口は1878(明治11)年10月31日に大蔵省を辞職した。

96) 福田徳三『鼎軒田口卯吉全集』第2巻「解説」34～36頁。

「斯くて暫くの間は此翻譯に因り負債も償却し得て心も安かりしが、其年の暮に至り、岩崎小二郎氏と渋沢栄一氏とは頻りに余に『經濟雜誌』を編輯すべきことを勧められけり。余は早く『日本開化小史』を完結せんと思ひたれども、斯る名士の懇談にもあり、且つ名声を世に出すことは心に欲せざる所にもあらざりしかば、終に之を承諾して『經濟雜誌』に従事することゝはなりしかども、是より亦た世事に奔走することとなりたれば家計は常に欠乏を告げたり。」<sup>97)</sup>

こうして、翌1879（明治12）年1月、田口卯吉は『東京經濟雜誌』の刊行という大事業に乗り出した。数え年24歳の春のことである。

---

97) 田口卯吉「自叙伝」『鼎軒田口卯吉全集』第8巻所収、85頁。